様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１２７２２

研究課題名（和文）子ども時代の「心に残る」読書に関する実証的研究：読書体験の形成要素と長期的効果

研究課題名（英文）An empirical study of 'memorable' reading in childhood: Formative factors of the reading experience and their long-term effects

研究代表者
須賀　千絵（SUGA, Chie）

実践女子大学・文学部・講師

研究者番号：８０３１０３９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「読者の心を動かし、大人になっても記憶に残る読書体験」を「心に残る読書体験」と定義し、その形成要素と要素間の関係を構造的に分析し、その長期的効果について知るために、20代から60代までのインタビュー調査を実施した。その結果、「心に残る読書体験」の要素は「テキスト」「コンテキスト」「読者」の観点から分類できること、現在の視点で再構築された読書体験には、過去から構想された未来、または未来から方向づけられる現在の内容を含む例も見られ、読者のアイデンティティの形成に寄与しうることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来の読書研究の多くは、読書体験や効果は客観的に把握できるという前提に基づく研究であったのに対し、本研究は、読書経験や効果は主観的に構成されるという新たな立場で研究を進めた。従来の客観主義の研究に対し、新たに構成主義的な観点による読書研究の可能性を開いたものであり、本研究には学術的な意義がある。
　近年、子どもの読書は世界的な政策課題となっているが、その長期的効果は明らかになっていない。本研究は、現代の政策課題の根拠を示したものであり、社会的意義が認められる。さらに、本研究期間中の新型コロナウイルス感染拡大による子どもの読書環境の変化についても調査を行い、歴史的記録を残すことができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we defined 'memorable reading experiences' as 'reading experiences that deeply move readers emotionally and remain in their memories even after they become adults'. Interview surveys are conducted for adults in their 20s to 60s, to understand the elements of such experiences, the relationships among these elements, and their long-term effects. As a result, it was found that the elements of ‘memorable reading experiences’ can be categorized in terms of 'text', 'context', and 'reader', and that reading experiences reconstructed from the present perspective. Some of them include future content conceived from the past, or present content oriented from the future, and can contribute to the formation of readers' identities.

研究分野：図書館情報学

キーワード：読書　子ども　読書体験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

読書体験の多くは、時間の経過と共に、次第にその記憶が薄れていく。しかし中には、長い時間を経ても記憶に残る読書体験が存在することが、経験知として広く社会で共有されている。本研究では、「読者の心を動かし、大人になっても記憶に残る読書体験」を「心に残る読書体験」と定義する。一方で読書に質的な差異があることは知られていても、「心に残る読書体験」の実態について研究した例は数少ない。

「心に残る読書体験」を知るには、子ども時代から一定の時間を経過した成人に尋ねる必要がある。少数ではあるが、成人に対するアンケートや読書の記憶について記述した手記を利用して、「心に残る読書体験」を分析した先行研究が存在する。しかしアンケート調査では、情報量の制約から、体験の詳細を知ることは難しい。また手記の分析においても、「心に残る読書体験」につながる要素がいくつか指摘されてはいるものの、それぞれの要素間の関係について構造化された分析を行うには至っていない。

「心に残る読書体験」は、心理学で「自己に関する記憶の総体」と定義される「自伝的記憶(autobiographical memory)」のひとつと考えられる。自伝的記憶の機能としては、自己の連続性や一貫性を支え、望ましい自己像を維持するという自己機能、成人後のコミュニケーションや対人関係に過去の経験を役立てる社会機能、さまざまな判断や行動の方向づけに役立つという方向づけ機能の３つが指摘されている。従って「心に残る読書体験」も、成人以降の読書活動のみならず、その後の人生全体に幅広い意義を持つ可能性がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、子ども時代の「心に残る読書体験」の形成要素とその要素間の関係を構造的に分析することを通して、その長期的効果を明らかにすることである。読書の実態は、読書環境の変化により変わることが予想されるため、幅広い年代の人々の子ども時代の読書体験を研究の対象とする。

３．研究の方法

本研究は、（１）日本の子どもの読書の歴史の整理、（２）子どもの読書行動の実際の観察、（３）インタビュー調査、（４）課題レポート調査、（５）新型コロナウイルス感染拡大に伴う読書環境の変化の調査から構成される。

まず、メインとなる「心に残る読書体験」の分析に先立ち、予備的作業として、（１）日本の子どもの読書の歴史の整理、（２）子どもの読書行動の実際の観察を行った。分析の対象となる各時代の社会背景や読書推進の取組等を知るために、文献をもとに、日本における子どもの読書をめぐる歴史的な推移を整理して、年表にまとめた。次に、子どもの読書行動の実際について知るために、子どもが読書を行う場である１１の子ども文庫を直接あるいはオンラインで調査し、子どもが本を選んだり、読んだりする様子を観察し、訪問記録を作成した。特に 2 つの文庫については、文庫に来る大人と子どもの行動を中心に、詳細な観察記録を作成した。

本研究のメインとなる子ども時代の読書体験については、成人に対するインタビュー（３）や学生の課題レポート（４）を通して、分析対象となるデータを収集した。

インタビューは、20 代から 60 代までの男女 19 名を対象に行った。対象者の内訳は、表１の通りである。本に関わる職業に就いている人を中心に、スノーボールサンプリングで対

象者を集めた。インタビュー対象者の構成は、世代や性別がほぼ均等となるように留意した。

表 1　インタビュー対象者の内訳

年齢	男性（人）	女性（人）	計（人）	職業等
20 代	2	2	4	大学院生２、団体職員（読書振興）、会社員
30 代	1	2	3	大学院生、文筆業、図書館員
40 代	2	1	3	図書館員、会社員（児童書出版）2
50 代	4	3	7	図書館員３、団体職員２（読書振興１、その他１）、文筆業、公務員
60 代	1	1	2	文筆業、公務員
計	10	9	19	

これら 19 名の対象者に対し、対面及びオンラインで、単独ないし年代の近い対象者を複数集めたグループによるインタビューを実施した。子ども時代の読書体験について、幼少期から順に、自由に語ってもらい、その内容を文字に起こし、話のまとまりをエピソードとして分割した。

分析にあたっては、まず、先行研究をもとに、テキスト・コンテキスト・読者という観点を設定した。読書体験のエピソードごとに分析を進め、コードを整理して分析の枠組みを作り、コード間の関係を考察した。分析は、インタビュー対象者の年代ごとに行い、その都度、分析の枠組みを見直し、精緻化を図った。

学生の課題レポートについては、当初は、研究代表者と分担者の勤務する複数の大学での子ども時代の読書体験に関する課題レポートの内容分析を進める計画であった。関連する大学で研究倫理審査を行い、承認を得た範囲のレポートについて、内容分析のためのデジタル化を行った（４）。しかし一部の大学では、当該大学の研究倫理審査の対象外であるという理由などで審査を受審できなかったり、研究倫理審査の承認を得ることができても、実施に際し、予想より厳しい条件がついた大学もあった。そのため、研究対象とすることが可能な課題レポートの数が、予定を大幅に下回った。そこで研究方法を見直し、当初の課題レポートの調査を中心とする研究方法から、インタビュー調査を中心とする方法に切り替えた。

研究開始後に、世界で新型コロナウイルスの感染が拡大し、学校や図書館が閉鎖され、外出も制限されるなど、子どもの読書環境が激変した。そこでこの時代の記録を残すために、急遽、2020 年春の新型コロナウイルス第 1 波の感染拡大期に焦点を絞り、全国の公共図書館による児童サービスの状況について調査した（５）。web の情報をもとに、新型コロナウイルスの感染拡大に応じて、図書館が実施したサービスの事例を収集・整理し、その特徴を分析した。

４．研究成果

（１）日本の子どもの読書の歴史に関する整理

文献をもとに、日本における子どもの読書をめぐる歴史的な推移を整理した。その結果は、『子どもの読書を考える事典』で年表にまとめた。特に 2000 年代以降については、本研究の社会的意義を考えるうえで重要であると思われることから、別途、詳細な整理を行い、論文にまとめた。

（２）子どもの読書行動の実際の観察

本研究は、大人になってから振り返っての子ども時代の読書の記憶を分析の対象としており、事例を直接観察するものではない。そこで事例の分析に役立てるため、2019 年から 2021 年にかけて、11 の子ども文庫を調査し、子どもが本を選んだり、読んだりする様子の観察を行った。訪問の記録は、子どもの本と読書に関する専門団体の機関誌で発表した。

子ども文庫は、豊かな読書体験を持つ子どもが多く集まる場であり、実際の読書行動を間近に観察することが可能である。複数の子ども文庫における調査から、集団での読みと個人での読みの切り替えが行われること、子どもによって読み方に多様なタイプが存在することなどを確認することができた。一連の調査を通じて、子どもの日常的な読書行動についての理解が深まり、「心に残る読書体験」の分析における示唆を得ることができた。

（3）インタビュー調査

子ども時代の「心に残る読書体験」の分析に先立ち、先行研究をもとに、分析枠組みの構築を行った。まず「読者反応理論」に関する研究の複数のレビュー論文から、研究を整理する際に用いられる概念を抽出し、概念間の関係を考慮したうえで、分析の枠組みを仮定した。この仮の枠組みをもとに、複数の人々の読書体験を集めた Carlsen and Sherrill の"Voices of Readers"(1988)と山口雅子の『絵本の記憶、子どもの気持ち』(2014)の記述を対象に、実際に分析を試行し、仮定した枠組みの検証と精緻化を行った。その結果、「テキスト」（作品・登場人物・絵など）・「コンテキスト」（時間・空間・周囲の人々など）・「読者」（読みのスタイル、読む以外の行動、内面など）の 3 点から成る分析枠組みは、研究を行ううえで活用可能であることを確認できた。分析枠組みに関する研究の成果は、2019 年度日本図書館情報学会研究大会において発表した。

次に、20 代から 60 代の男女 19 名を対象にインタビュー調査を実施し、子ども時代の「心に残る読書体験」を収集した。インタビューの結果から、それぞれの「心に残る読書体験」を抽出し、先に構築した「心に残る読書体験」の分析枠組みに基づいて、個々の体験の形成要素を整理した。さらに個別の読書体験のほかに、子ども時代の読書体験全体に対する認識として、言語化された発言も収集した。2022 年度に調査を行い、研究期間終了までに、19 名中 11 名の分析を終了した（予備的分析を含む）。分析未了のデータについては、研究期間終了後も継続して分析を行っている。

インタビュー調査の結果、読書体験は複合的な体験であり、本を実際に読む行為の前後の行為を範囲に含むこと(図１)、特にコンテキストに分類される構成要素が多く、読書体験か

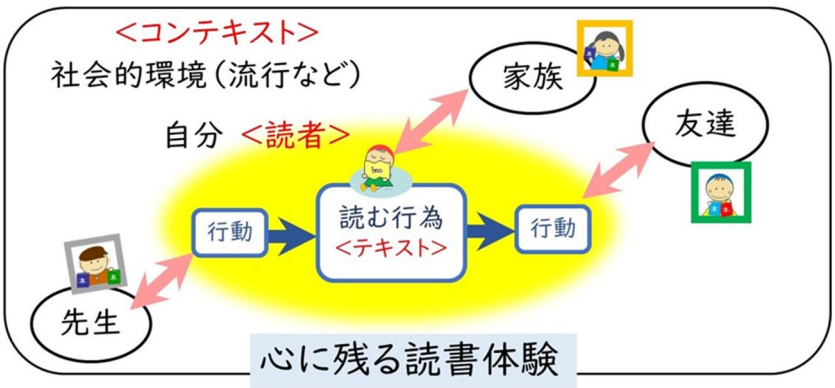

図 1

らコンテキストを切り離すことができないこと、「心に残る読書体験」は、現在の自分の視点から再構築された体験であり、過去の体験そのものではないことが明らかとなった。「心に残る読書体験」の中には、過去から構想された未来、または未来から方向づけられる現在

の内容が含まれている場合があり、読者のアイデンティティの形成にも寄与しうるという効果が見いだされた。2022 年度及び 2023 年度日本図書館情報学会研究大会において、インタビュー調査の結果のうち、20 代、30 代及び 40 代の男女の読書体験の分析結果を発表した。

（４）課題レポート調査

都内４大学において、子ども時代の読書体験に関する課題レポートを収集した。収集したレポートについては、各大学の判断に基づき、研究倫理審査の審査を受けたうえで、内容をデジタル化した。しかし、研究の方法において述べたように、収集数が予定を大幅に下回ったため、インタビュー調査を優先して実施することに切り替えた。本研究でデジタル化を終えたレポートについては、研究期間終了後も、継続して分析を行うため、あらためて分析方法を検討している。

（５）新型コロナウイルス感染拡大による読書環境の変化に関する調査

2020 年春の新型コロナウイルス第 1 波の感染拡大期における国内の公共図書館による子どもに対するサービス状況を調査した。本調査は、新型コロナウイルスの感染拡大により、子どもの読書の前提となる環境が脅かされたという認識のもと、現実社会の問題と研究を関連付け、研究の社会的意義を高めるねらいで実施した。調査の結果は、国際図書館連盟の年次大会において招待講演の形で発表した。併せて本調査に関する学術論文等の執筆も進めた。

＜引用文献＞

Carlsen, Robert G; Sherrill, Anne. Voices of Readers. National Council of Teachers of English, 1988, 155p.

山口雅子『絵本の記憶，子どもの気持ち』福音館書店, 2014, 103p.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 汐﨑順子・須賀千絵	４．巻 2022年版
２．論文標題 コロナ禍における児童サービス	５．発行年 2023年
３．雑誌名 年報こどもの図書館2017-2021	６．最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 汐﨑順子	４．巻 20(2)
２．論文標題 沙羅の樹文庫：緑の森の中につくった夢の文庫	５．発行年 2020年
３．雑誌名 この本読んで！	６．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 汐﨑順子	４．巻 20(3)
２．論文標題 メルボルンこども文庫・メルボルン青空文庫：異国の地で生まれる・つながる	５．発行年 2020年
３．雑誌名 この本読んで！	６．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 汐﨑順子	４．巻 20(4)
２．論文標題 汐見台文庫：地域の本棚，みんなの文庫	５．発行年 2020年
３．雑誌名 この本読んで！	６．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子・井元有里・須賀千絵	4．巻 67(12)
2．論文標題 子どもの読書，読書行動：2つの文庫の調査から その1	5．発行年 2020年
3．雑誌名 こどもの図書館	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子・井元有里・須賀千絵	4．巻 68(1)
2．論文標題 子どもの読書，読書行動：2つの文庫の調査から その2	5．発行年 2021年
3．雑誌名 こどもの図書館	6．最初と最後の頁 14-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子	4．巻 21(1)
2．論文標題 ちいさいおうち：「本の力」を信じる思いをつないだ文庫，未来につなげる文庫	5．発行年 2021年
3．雑誌名 この本読んで！	6．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子	4．巻 19(2)
2．論文標題 きりん文庫かすが：文庫をつなぐ「人」の力	5．発行年 2019年
3．雑誌名 この本読んで！	6．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子	4．巻 19(3)
2．論文標題 うみとやまのこどものとしょかん：幼稚園の先生とお母さんたちが開いた“子ども文庫”	5．発行年 2019年
3．雑誌名 この本読んで！	6．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子	4．巻 19(4)
2．論文標題 はまなす文庫：地域に根づいた文庫の力，その広がり	5．発行年 2019年
3．雑誌名 この本読んで！	6．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子	4．巻 20(1)
2．論文標題 もりのいえ文庫：新しい文庫がつくる新しい絆・広がり	5．発行年 2020年
3．雑誌名 この本読んで！	6．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 汐﨑順子	4．巻 61(3)
2．論文標題 子どもと子どもの読書の今とこれからを考える	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代の図書館	6．最初と最後の頁 144-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 須賀 千絵、汐﨑 順子	4．巻 69(4)
2．論文標題 新型コロナウイルス感染症感染拡大第1波期間における公立図書館の児童サービス	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本図書館情報学会誌	6．最初と最後の頁 169～185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20651/jslis.69.4_169	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 須賀千絵・汐﨑順子
2．発表標題 子ども時代の「心に残る読書」の形成要素：20代男女に対するインタビュー調査をもとに
3．学会等名 第70回日本図書館情報学会研究大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Junko Shiozaki
2．発表標題 Digital (and non-digital) efforts of Japanese children’s librarians under the COVID-19 situation
3．学会等名 IFLA WLIC 2021 Libraries for Children & Young Adults Section（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 須賀千絵・汐﨑順子
2．発表標題 「心に残る読書」の分析枠組みの構築
3．学会等名 第67回日本図書館情報学会研究大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 須賀千絵・汐崎順子
２．発表標題 「心に残る読書体験」の形成要素：30・40代を中心とする男女に対するインタビュー調査をもとに
３．学会等名 第71回日本図書館情報学会研究大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 汐崎順子	４．発行年 2023年
２．出版社 朝倉書店	５．総ページ数 495
３．書名 子どもの読書を考える事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

子ども時代の「心に残る読書体験」を考える（研究成果報告会報告書） https://sites.google.com/jissen.ac.jp/kokoro1/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	汐崎　順子 (SHIOZAKI Junko) (50449021)	慶應義塾大学・文学部（三田）・講師（非常勤） (32612)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関